

令和3年度病虫害発生予察情報 予報第1号（4月）

令和 3年 4月 23日
発表：福島県病虫害防除所

1 普通作物

作物名	病虫害名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
水 稲 (育苗期)	苗立枯病 (ピシウム属菌、フザリウム属菌等による立枯病)	全 域	—	平年並	天候予報(4月15日発表1か月予報)によると、向こう1か月の気温は高いと予想されている(±)。	日中の気温変動が大きくなりやすい。急激な温度変化や過湿・乾燥の繰り返しは発生を助長するので、適切な温度管理を行う。
	もみ枯細菌病	全 域	—	平年並	種子更新率は平年並である(±)。天候予報によると、気温は高いと予想されている(+)。近年少発生が続いている(-)。	育苗期間中は28℃以下の温度管理を行い、特に30℃以上の高温や過湿は避ける。育苗器内の温度は、付属センサーだけでなく温度計を併用し、温度ムラに注意する。育苗時期の気温の変動が大きいので、育苗ハウス等の開閉をこまめに行う。
	苗立枯細菌病	全 域	—	平年並		
	イネミズゾウムシ	全 域	やや早い	平年並	有効積算温度によるシミュレーションでは、水田侵入盛期がやや早いと予想される。本田内での発生ほ場割合が平年並であるが、一部で発生が目立つほ場がみられる(±)。	水田侵入盛期が移植時期と重なる場合は、被害が大きくなるので注意する。
	イネドロオウムシ	全 域	平年並	平年並	有効積算温度によるシミュレーションでは、水田侵入盛期は平年並と予想される。本田内での発生ほ場割合が平年並だが、一部で発生程度の高いほ場がみられる(±)。	幼虫期に低温が続く場合は、被害が大きくなるので注意する。育苗箱施薬では、散布量が適切か確認する。
麦 類	赤かび病	全 域	やや早い	平年並	出穂期は平年よりやや早いと予想される。天候予報によると、降水量は平年並と予想されている(±)。	麦の開花始め(小麦では出穂期の7～10日後頃)が薬剤防除適期であり、時期を逃さず実施する。前年に発生が見られたほ場は、防除の徹底をはかる。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(-)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

2 果樹

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	うどんこ病	全域	—	平年並	4月中旬の花そう葉での発生は、平年同様に確認されなかった(±)。	罹病葉は見つけしだい、せん除して園外に持ち出すなど適切に処分する。
	リンゴハダニ	中通り 会津	— —	平年並 やや多い	前年の越冬量調査において、越冬卵が確認されたほ場の割合は中通りで平年並(±)、会津で平年よりやや高かった(+)	越冬卵密度の高い園地では、発生密度に注意し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達したら殺ダニ剤を散布する。
	ハマキムシ類(越冬世代)	全域	—	平年並	4月中旬の越冬世代幼虫による花そう被害の発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	前年発生が多かった園地や現在花や新梢に食害が見られる園地は、落花直後の防除を徹底する。 複合交信かく乱剤を使用する園地では越冬世代成虫発生初期までに設置する。
モモ	せん孔細菌病	全域	—	やや多い	4月中旬の春型枝病斑の発生ほ場割合は、平年よりやや高かった(+)	春型枝病斑は見つけしだい、せん除して適切に処分する。(注意報第1号参照) 薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する。
	モモハモグリガ(第1世代幼虫)	全域	—	平年並	前年の越冬量調査において、越冬成虫の発生地点割合は、平年並であった(±)。	初期の発生密度を抑えるために、第1世代幼虫発生期(落花10日後)にネオニコチノイド剤を散布する。 前年発生が多かった地域では防除を徹底する。
	ハマキムシ類(越冬世代)	全域	—	平年並	4月中旬の越冬世代幼虫による花そう被害の発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	複合交信かく乱剤を使用する園地では越冬世代成虫発生初期までに設置する。
ナシ	黒星病	全域	—	やや多い	前年の越冬量調査において、鱗片における越冬病斑の発生ほ場割合は平年より高く、発生程度の高いほ場も確認された(+) 4月上旬の調査において、29園地中9園地で芽基部病斑の発生が確認された(±)。	芽基部病斑は、花芽に鱗片が脱落せず付着しているので、発見の目安とし、見つけしだい除去し、園外に持ち出すなど適切に処分する。 薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する。 (令和3年4月15日付け防除情報参照)

ハダニ類 (リンゴハダニ、クワオオハダニ)	全域	—	平年並	前年の越冬量調査において、越冬卵が確認されたほ場の割合は平年並であった(±)。	越冬卵密度の高い園地では、発生密度に注意し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達したら殺ダニ剤を散布する。
ハマキムシ類(越冬世代)	全域	—	平年並	4月中旬の越冬世代幼虫による花そう被害の発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	前年発生が多かった園地や現在新梢に食害が見られる園地は、落花直後の防除を徹底する。 複合交信かく乱剤を使用する園地では越冬世代成虫発生初期までに設置する。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(-)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

リンゴ	<p>○注意が必要な病害虫</p> <p>■腐らん病</p> <p>今後、降水量が多くなると、感染が拡大するおそれがあります。防除を徹底しましょう。</p> <p>ほ場での発生状況をよく観察し、本病が発生している枝や幹の発病部位は、徹底して除去しましょう。枝腐らん病は、健全部5cm以上含めてせん除し、胴腐らんは、周囲の健全部まで5cm広く削り取ってください。切り口には必ず殺菌塗布剤を塗布し、感染を防止しましょう。また、除去した発病部位は伝染源となるおそれがあるので、園外に持ち出し適切に処分しましょう。</p> <p>「ふじ」は摘果が遅れると果柄が脱落しにくくなり、本病に感染しやすくなるので早期に摘果を実施しましょう。</p> <p>■黒星病</p> <p>本病の最重点防除時期は、展葉期から落花20日後頃であるので、この期間の薬剤散布間隔があきすぎないように注意し、散布ムラのないよう十分な量を散布しましょう。</p> <p>本県では未確認ですが、青森県をはじめ他のリンゴ産県で本病の重要防除剤であるDMI剤耐性菌の存在が確認されています。本剤耐性菌がまん延すると防除薬剤の効果が低下するおそれがあるので、DMI剤の使用回数に留意しましょう。また、リンゴ苗木・穂木等を導入する際は十分注意しましょう。</p> <p>病害虫防除所HP「注意喚起 他県でのリンゴ黒星病におけるDMI剤耐性菌の発生について」 URL : http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/apple-dmi.html</p>
モモ スモモ ウメ 等	<p>■クビアカツヤカミキリ</p> <p>近年、外来種であるクビアカツヤカミキリの寄生が隣県で確認されております。本県では未確認ですが、確認した場合は病害虫防除所までご連絡ください。</p> <p>本害虫の幼虫は、サクラや果樹類(モモ、スモモ、ウメ等)の樹の内部を食い荒らし衰弱させ、2~3年間樹内で成長し、6月中旬~8月上旬頃に成虫となって樹木の外に出ます。成虫の体長は約3~4cmで、全体が光沢のある黒色をしており、前胸部が赤いのが特徴です。疑わしいフラス(木屑と虫糞が混じったもの)や成虫を確認した場合は、病害虫防除所までご連絡ください。</p> <p>病害虫防除所HP「注意喚起 クビアカツヤカミキリの情報提供にご協力願います」 URL : http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/kubiaka.html</p>

3 野菜・花き

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
イチゴ	うどんこ病	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	多発すると防除が困難になるので、発病初期から防除を実施する。
	灰色かび病	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	加湿にならないよう換気を行う。 発病果や罹病した果梗、老化葉などは、ハウス内に放置しない。
	アブラムシ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	低密度時から防除を実施する。
	ハダニ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	低密度時から防除を徹底する。 抵抗性の発達が懸念されるので、殺ダニ剤の選択には注意する。 カブリダニ製剤等の天敵を放飼している場合は、天敵に影響の少ない薬剤を選択する。
	コナジラミ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	寄生程度の高いほ場では、すす病の発生が懸念されるため、低密度時から防除を徹底する。
アザミウマ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	施設の側面開放により、飛び込みが多くなる。寄生が多くなると果実被害が生じるので、低密度時から防除を実施する。	

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(-)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

イチゴ	<p>○注意が必要な病害虫</p> <p>■土壤病害(萎凋病、萎黄病、炭疽病)</p> <p>無病地からの採苗、育苗を徹底することが基本的対策となるため、ほ場で発病が確認されている場合は次年度に向けて以下の対策を実施してください。①育苗用土壌やポット等の資材を一斉に更新する。②炭疽病は水媒伝染するため、親株を育苗する際は雨よけ育苗や高設育苗を行うとともに、頭上からの灌水を避ける。③発病株、または発病が疑われる株は、見つけしだいその周囲の株と土を含めて丁寧に抜き取り、適切に処分する。④これらの病気が発生したほ場で連作せざるを得ない場合は、土壌消毒を実施する。</p> <p>なお、イチゴの土壤病害の簡易検定方法について、病害虫防除所ホームページの病害虫ライブラリー(野菜花き類の病害虫、イチゴの病害)に掲載しているので参考にしてください。</p> <p>URL : https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/433111.pdf</p>
-----	---